

vol. 16



SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART

当世踊子揃 三喜皮



哥磨華

初公開 スイス・バウアーコレクション

浮世絵 美の極致

平成 13 年 2 月 4 日 ㊦ まで

新世紀への旅立ち



館長より記念品を贈られる川俣美智子さん（市内花見川区在住）

新年、そして新しい世紀を無事に迎えることができ、まことに
お目出とうございます。光陰は矢の如しといいますが、まことに
時の移り行くことは早いものです。

千葉市美術館も昨年11月に満五周年を経過し、六年目に入ること
になりました。その開館五周年記念展と銘打った「菱川師宣展」
は、一般の方々にもおなじみの「見返り美人図」などの代表作が
一堂に会し、専門家をもうならせるこだわりの展示が好評を博し、
多くの来館者に恵まれることができました。その特別展の最終日
に、開館以来の美術館入場者が五十万人に到達したのも、偶然と
はいえ美の神様のおぼしめしかと感ぜられたものでした。ちょう
ど五十万人目に当たった市内花見川区の主婦川俣美智子さんは、
美術鑑賞を趣味として当館にも何度か足を運ばれたとの由、ご縁
の深い方と喜びを分かちあえて、これまたまことに幸いなことで
した。

5年と1ヶ月で五十万人という数は、どう評価して良いか、正直
言ってもまどうところ。多いといえば、問題意識の高い展覧
会に挑戦してきた割にという条件付きになるでしょうし、少ない
というなら、より多くの市民に親しまれるようにいっそうの努力
が必要と言うことになりましょう。東京に近い千葉という立地を
考えて、千葉ならではの個性を光らせようといささか意気込みす
ぎたきらいも、あったかも知れません。ロケットでいえば、一段
目のロケットが切り離されて二段目に火がついたところと、たと
えることができますか。一定の推力が出るまで多少無理をし

ながらも加速した5年間
を経て、これからは長い
安定した軌道に入るため
の微調整が必要かと考え
ています。そのためには
美術館の内部でも知恵を
しばっていきますが、外
からのご支援と、ご助言
とが、願われます。この
「千葉市美術館ニュース」
にも皆様からのお声を反
映させることができたら
と思っています。どうか
気軽にお便りをお寄せ頂
ければ幸いです。



喜多川歌麿（風俗浮世八景 他所行の帰帆）

当館には、開館以来
「友の会」を設けてきました。先の「菱川師宣展」の会期中に、
とくに会員の皆様のみを対象として、私から特別展の見所をご案
内するお話をさせて頂きました。ささやかな和菓子と粗茶を召し
上がっていただきながら、くつろいだ雰囲気、文化の日の昼下
がりのひとときを楽しんでいただきました。また、新年早々の
「初公開 スイス・パウアーコレクション 浮世絵 美の極致」
では、ジュネーブからわざわざ来日して下さるフランク・デュナ
ン館長のご臨席を頂いて開会式を開きますが、その式典にもご招
待させていただいています。晴れがましいテープ・カットに拍手
の花を添えて頂ければ、友の会の皆様と美術館との親しみを実感
する機会ともなることでしょう。これからも様々な行事を考えて
行きますので、一人でも多くの方が入会して下さいませよう、
心から希望しております。

2001年の迎春をことほいで開催するパウアー・コレクション展
は、私のかねてから熱望していた里帰り展です。パウアー・コレ
クションといえば、中国の陶磁器の素晴らしい収集で有名ですが、
浮世絵版画も大変美しい質を誇るものです。今までジュネーブの
美術館以外でまとまって公開されたことはなく、文字通り世界初
公開の華麗な展覧が千葉で実現するのです。どうかこの二度とな
い機会をお見逃しのないよう、賑々しいご来場を館員一同ととも
にお待ちしております。

本年もよろしく願い申し上げます。

千葉市美術館館長 小林 忠

パウアーコレクションの歌麿作品



喜多川歌麿《風俗浮世八景 髪洗之落雁》

パウアーコレクションには、喜多川歌麿の作品が二十五点含まれている。他の大きな美術館のコレクションに比して数は少ないが、名品あるいは珍品の割合は高い。このたびの里帰り展で展示されるのは、そのうちの十七点である。以下、その中のいくつかの作品について述べてみたい。

二十五点中、パウアーコレクションにしか所蔵されていない作品は、「風俗浮世八景」（大判）

の八枚揃中の五枚、「当世踊子揃 三番叟」（大判）、「団扇を持つ美人」（大判、1797年頃 泉佐版）、「青楼仁和嘉全盛遊 若みどりうかれ万歳」（間判 1798年頃 蔦屋重三郎版）の八点もある。そのうち、今回展示されるのは、「風俗浮世八景」八枚揃と「当世踊子揃 三番叟」である。

「風俗浮世八景」は、寛政八、九年（1796、97）年頃に制作刊行された八枚揃である。伊勢屋与兵衛という、歌麿作品の版元としてはほとんど実績のないところから出された美人大首絵のシリーズである。女性の日常の何気ないしぐさを、八景の景観に結び付けたもので、人気の絶頂を極めた歌麿の、穏やかな女性描写が見どころであろう。

たとえば、「髪洗之落雁」。長い煙管を持つところから遊所の女と察せられる。折しも、金盥か何かで髪を洗ったばかりである。当時は、風呂に入った時に髪を洗うのではなく、着衣のまま洗うのが普通であった。当然、着物が濡れるので、上着・間着の袖を脱いで上半身は下着だけ、又は、下着も脱いで、上半身裸というのが髪洗うスタイルである。この女性の上半身が下着のみであるのはそういう訳である。洗い終えて髪を拭き、ふうっと一服、という情景であろうか。左手で髪を撫で上げるしぐさと、右手首を軽く曲げてそれに呼応させているところがなかなか憎い。胸をただけげんのあだな姿であるが、表情は清々しい色香を発散させている。髪に一本の簪を差してアクセントをつけているが、これは、歌麿の遊びである。髪を結う前に簪を差しても意味はないが、これがないと絵として物足りないと考えたのであろう。絵空事と

みてよいが、浮世絵にはよくある情景である。ポーズをとらしての写生の可能性もわずかにある。副題の「髪洗之落雁」は、髪を洗っている光景、あるいは洗い終えたばかりの垂髪を、群れ落ちる雁になぞらえたものと思われる。

同じシリーズの「他所行の帰帆」も爽やかな作品である。「他所行」とあるから、この女は吉原芸者と考えられる。吉原芸者が廊外の客に呼ばれての外出姿であろう。島田髷に二、三の髪飾りをしているので、まだ若い。二十歳前後と想像してみよう。黒い薄物を着て扇を使っているところから、夏の景ということになる。当時の錦絵はこの薄物の描写が非常にうまい。白い扇をこの薄物の黒に対比させ、若い芸妓の顔を支えている。扇を白い帆に見立てて、「帰帆」と洒落ているのである。時代は二十年ほど下るが、同じパウアーコレクションに、歌川国貞画「江戸芸・北国他所行・田舎娘」（大判三枚続 出品番号140）という作品があるが、その中央の一枚も、吉原芸者の他所行風俗を描いている。

「当世踊子揃 三番叟」（表紙参照）は、寛政五、六年（1793、94）頃に制作された五枚揃のシリーズ。歌麿版画の代表的版元である蔦屋重三郎から、正に絶頂期に刊行された作品であるが、なぜか今に残る作品は少なく、本図は、パウアーコレクションにしかない。五年前の千葉市美術館開館記念「喜多川歌麿」展には、五枚揃中、この図を除く四枚が展示されたので、このたび五年ぶりに、残った一枚が展示されることになった次第である。そういう意味で、この図は、パウアーコレクションを象徴する作品といってよい。踊子とは、女芸者の一種で、舞踊を表芸としたやや若めの芸者をいう。吉原芸者をモデルにしたものか町芸者をモデルにしたものかは判然としないが、蔦重と吉原の関係の強さから考えて、吉原芸者の可能性が高い。背景を白雲母摺とし、やはり歌麿の代表作である「歌撰恋之部」同様、顔部を通常の大首絵より更に大きく描いているところに特徴がある。「三番叟」は、能の「翁」に由来するものであるが、歌舞伎に取り入れられて発展し、種々多様な舞踊を生む。本図のように、剣烏帽子を冠するのが特徴で、扇を持った右手を振り上げているところである。頭の上の大きな剣烏帽子を上辺と右辺で切り、顔部を中心とした画面に、左下の衣裳と対称させ、左上の扇には、右下の袖の一部を対応させた構図が非凡である。美人の顔は、歌麿盛期の輝くばかりの艶やかな魅力を発散させている。

これらの他、最盛期の美人大首絵の代表作「婦女人相人品 文読む女」や「富本豊ひな」、大判二枚続の群像表現の名品「台所」など、コレクションの水準は高く、汲むべき春の泉の水は尽きない。

本館学芸係長 浅野秀剛

スイスの宝石 バウアーコレクション

スイスのジュネーヴに位置するバウアーコレクションは、欧米の美術館としては小規模ながら大変美しい美術館である。展示品の内容を伝える旗が建物に掲げられていなければ、おそらく美術館とも気がつかない、静かな高級住宅街の一角という雰囲気である。日本ではすでに中国陶磁の展示会が行われたことがあるが、日本美術でも陶磁器、漆工芸品、根付、刀装具、そして浮世絵と、質の高い東洋美術が多く所蔵され、室内を飾るように美しく展示された品のよい展示室は心安らかな空間である。

これらの珠玉の美術品を収集したアルフレッド・バウアー氏(1865～1951)は、チューリッヒの小村の鍛冶・錠前屋の息子として生まれており、東洋美術とは無縁の環境にあったといわれる。青年期より10年間貿易会社に勤め、英国領セイロン島に派遣されたが、やがて独自にココヤシの大農園を買って肥料配合の研究をし、1897年にバウアー・セイロン肥料会社を設立して財を成している。

妻の故郷であるジュネーヴに定住したのは、1906年のことであった。まさにその年、バウアー氏は東洋美術の収集に本格的に着手している。なぜ東洋美術であったのかは、バウアー氏個人の記録には何も語られておらず、実際日本・中国へ旅行したのも、長期ではあったが1924年のただ一度だけであった。そしてそのコレクションのほとんどは、日本に在住していたトーマス・ベイツ・ブrow氏と富田熊作氏という、彼が信頼を置き親しくしていた二人のディーラーを通してジュネーヴへもたらされたのであった。

しかしその時代背景を考える時、バウアー氏が東洋美術の収集を始めたのはごく自然の成り行きともいえる。19世紀後半から20世紀初頭、ジャポニスム、シノワズリと呼ばれた欧米人たちの東洋美術・文化への愛好熱は、バウアー氏のコレクター魂を刺激するに十分なパワーを持っていたはずだからである。欧米のコレクター、美術家、音楽家がこぞって東洋美術を買いあさり、その邸宅を飾り、また芸術家たちが自分の創作活動に東洋の表現を取り入れようとした時代の熱狂を、バウアー氏は身近なものとして感じていたに違いないのである。

先にバウアーコレクションの展示室について「心安らかな」といったのは、この美術館が20世紀の初めに建てられたクラシックな邸宅を生かした構造だからであり、行き届いた展示方法の美しさゆえであり、またその美術品自体が、例えば陶磁器でも、根付、刀装具にしても、何か手の上ののせて見たいような可憐さを持ったものが多いという特徴によるのであろう。

それはジャポニスム・シノワズリの熱狂下における東洋美術収集のあり方とはまた別の、「手にとって愛玩する」ことにこだわったこのコレクター独特の好みによるものといえる。美術館を作るという構想自体もバウアー氏の考えに発したことであったが(バウアーコレクションは1964年に設立されている)、この邸宅を美術館の建物として選び、現在の名称のとおり美術館と呼ぶよりもコレクションと呼ぶ方を好んだというあたりにも、その美術品に対する感じ方はよく出ているように思う。

もちろん浮世絵版画はジャポニスムの熱狂を刺激する中心的な存在であったが、同時にバウアー氏にとっては自分のこだわりを満たす作品であったことがわかる。目で鑑賞すると同時に手に取り、美術品と親密に接することの幸せを、バウアー氏は最も大事に思っていたのであり、彼の美術品は常に小さく可憐でなければならなかった。

江戸時代の人々がどのように浮世絵版画を鑑賞していたか。多くの場合はやはり手にとってながめ回していたのであり、バウアー氏もまた江戸っ子たちと同じように、手に和紙の感触を感じながら、微妙な色、ぼかし、空摺など浮世絵版画ならではの摺の妙を目に近づけながら楽しんでいたに違いない。

本館学芸員 田辺昌子

(注) Baurはフランス語圏のジュネーヴでは「ボール」と呼ばれることが多く日本で出版されているガイドブック等にもボールコレクションと表記されていることが多いが、Baur氏はドイツ語圏のチューリッヒ出身であり、ドイツ語の発音に従って本展ではバウアーと呼んでいる。



バウアーコレクション 建物外観

屏風の世界

屏風、「びょうぶ」と読みます。「屏」は塀と同じ意味で文字通りの意味としては風をふさぐものということになります。そもそもは古代の中国で床（しょう、木製の座・寝台のこと）の後ろに置いて風よけの家具として用いたものです。日本では、朱鳥元年（686）に新羅から献上されたとの記事が『日本書紀』にあります。正倉院には奈良時代の遺品が残っていますが、その構造は一扇（屏風の一折のこと）を紐で結んでつなげるものでした。その後日本で紐のかわりに紙の蝶番が工夫され、簡単に折り畳めて画面を連続させられるようになりました。室町時代には日本の特産品として明代の中国や李氏朝鮮へ屏風が送られ、南蛮貿易ではポルトガルやスペインへ屏風が輸出されました。

室町時代から江戸時代初期にかけて、一つの画面に四季を描いて描き込む一雙屏風が多く制作されたことは、数年前に当館で開催した特別展『祝福された四季』図録に詳しいのですが、循環する季節を画面内に封じ込めることによって屏風の中には完結した別世界が成立しているといえます。四季は揃わなくても、例えば雲谷等益「山水図」や松本山雪「瀟湘八景図」のような山水を題材にした屏風には、絵を見る人にとって画中の人物に自らをなぞらえて絵の中の世界を散策するような楽しみ方があったでしょう。室町幕府の12代将軍、足利義晴（1511～1550）の葬儀の際、その棺のまわりに表を外にして狩野元信の描いた金屏風を立てまわしたという記録があります。これは一種の「逆さ屏風」（死者の世界と生者の世界はすべてが逆なので、死者の枕元では屏風を上下逆に立てる風習）なのでしょうが、屏風の中で世界が完結しているという考えがあらわれています。

ときには屏風の裏に絵が描かれることもありました。鈴木其一「芒図」は当初より表に描かれたものらしいのですが、そっくりな「芒野図」は鈴木其一「白椿・芒野図」（フリア美術館、二曲一雙）の片割れです。フリア本は一雙の屏風の表裏で、金地に白椿の春、銀地に芒の秋が対比されていました。酒井抱一「夏秋草図」（東京国立博物館、二曲一雙）が尾形光琳「風神雷神図」（東京国立博物館、二曲一雙）の裏面であったことはよく知られています。通常表は裏と同等以上の画格なのですが、時代を経るうちに裏と表の地位が逆転してしまうこともあります。長澤蘆雪「朝顔・木賊図」（聖護院、二曲一雙）は銀地に朝顔などの草花が描かれた、酒井抱一「夏秋草図」にも通じる趣の作品ですが、実は裏面で表は狩野派の絵師による山水図でした。

屏風なんて見かけないとお思いの方も、ご家庭に雛人形がおりではないでしょうか。内裏雛の後ろにはたいてい小さな屏



図1 鈴木春信「蚊帳の母と子」

風があります。新郎新婦の金屏風も同じですが、空間を仕切って特別な場にしているのです。鈴木春信「蚊帳の母と子」（図1）には蚊帳の後ろに松と岩が描いてある屏風の三扇が見えます。このように屏風は折り畳んで移動できる部屋の間仕切りとして用いられており、所帯を持つのに必要な品々として「屏風畳に炭油」といわれるほど一般的なものでした。

生活の中では、目隠しにもなり脱いだものも架けておくこともできました。ヘレン・ハイド「The Bath」は赤ん坊にお湯を使わせているので、風を防ぐと同時に湯気が飛び散るを防ぐのかもしれませんが、寝床の周りに立てれば、畳生活での視覚的なプライバシーが保たれます。江戸時代の深川遊里では一つの座敷を屏風で区切って三組程度の男女が床をとったといいますが、歌川豊広「男女風俗図」の



図2 歌川豊広「男女風俗図」より

の一図（図2）はそんな屏風に囲まれたプライベートな関係を描いています。「屏風より外（ほか）知る人もなし」というときの屏風はこのような屏風をいっているのでしょう。

所蔵作品は屏風の豊かな世界の限られた一面を示すにすぎませんが、これを機に屏風に親しんでいただければ幸いです。

本館学芸員 伊藤紫織

*（ ）内所蔵明記作品以外は当館蔵で、所蔵作品展「屏風の世界」に出品。

「友の会」の特別講演会が行われました。

この秋千葉市美術館は開館五周年を迎え、これを記念し、国内外計41のご所蔵者のご協力を得た大規模な「菱川師宣」展が開催されました。その会期中の11月3日に、千葉市美術館「友の会」会員の皆様を対象とした、小林忠館長による特別講演会が行われました。このような企画は、実は開館以来初めての試みでした。

11月3日といえば、ちょうど5年前の開館日であり、本館の開館記念日ともいうべきよき日にあたります。現在の会員総数は355人ですが、当日はその約1割にもものぼる約30人ほどの皆様をお迎えしました。茶話会スタイルを少し意識した今回は、お茶とお菓子をお召し上がりいただきながら、まずは、開館記念展以来親しい交流を続けている大英博物館からの贈り物「眼鏡絵」と「のぞきからくり」に関連し、これまで短い期間ながらも積み重ねてきた美術館の人とものとの交流について、いくつかのエピソードのご紹介に話は始まりました。講演のタイトルは「千葉の生んだ偉人・菱川師宣と浮世絵の誕生」。菱川師宣の郷

土に対するこだわり、さらに江戸の人々が誇りとした師宣という存在についての話に自然と力が入ったのは、やはり地元千葉在住の方を中心とした参加の皆様の熱心な反応によるものでしょうか。館員の方も、イベント時によくお見かけするおなじみのお客様の姿を見出したり、ご夫婦で参加されたいと特にお申し出下さった方のこと、こうして顔を合わせてみてあらためて会員の皆様に支えられてきた5年間に思いを馳せた次第です。今後も皆様のご意見を伺いながら、このような企画を折にふれ行っていきたくと考えております。

2001年1月4日より始まる展覧会「浮世絵 美の極致 初公開 スイス・パウアーコレクション」では、オープンにあたりテーブルカットを行います。このセレモニーに友の会会員の皆様をご招待します。スイスよりお招きするパウアーコレクション館長のほか関係者と共に、新世紀の文字通りの幕開けをお祝いいたしますよう、ふるってご参加お待ちしております。

(2000年12月記)

「友の会」入会のご案内

千葉市美術館は開館以来、より身近な美術館づくりを目指しております。

千葉市美術館「友の会」は、美術を愛する人々にさらに親しまれる美術館づくりを進めるために誕生しました。皆様のご入会をお待ちしております。

【会員の特典は】

■無料サービス

千葉市及び助千葉市美術振興財団が主催する企画展や常設展が無料で何回も観覧できます。

■割引サービス

千葉市及び助千葉市美術振興財団が主催する展覧会図録が割引（販売価格の10%引き）で購入できます。

千葉市および助千葉市美術振興財団が主催する企画展や常設展の観覧料が同伴者も割引（3名まで団体料金）になります。

■情報サービス

千葉市及び助千葉市美術振興財団が主催する講演会等の美術館情報をお届けします。

【会員の資格は】

- 会員期間は、入会日から1年間です（美術館パスポートの発行を持って、会費納入の領収書とさせていただきます。）
- 学生会員の方は、学生証をご提示（コピーも可）ください。
- 途中で退会されても、会費の払い戻しはいたしません。

- パスポート紛失等により再発行を受ける場合は、手数料が必要となります。

【会費の額は】

■入会金

一般会員	1,000円
学生会員（高・専・大）	500円
ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族）	2,000円

■年会費

一般会員	年3,000円
学生会員（高・専・大）	年1,500円
ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族）	年6,000円

【入会の申込み方法は】

- 美術館8階の入館者受付に備えてある「入会申込書」を利用し、お申込みください。
- 休館日（臨時含む）や年末年始は、お申込みできません。
- 詳細は、千葉市美術館 TEL: 043-221-2311までお問い合わせください。

展覧会スケジュール

【休館日】月曜日（祝日の場合はその翌日）年末年始 展示替期間中

【開館時間】午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）

【ハローダイヤル】043-227-8600

※展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。



東洲斎写楽〈三代市川高麗蔵の志賀大七〉寛政6年（1794）

◆初公開 スイス・バウアーコレクション 「浮世絵—美の極致」2月4日（日）まで

ヨーロッパ屈指の東洋美術コレクションの中から、今回は特に浮世絵の優品を御紹介しております。ひとつのコレクションによって初期から幕末・明治にわたる浮世絵のあゆみをたどることができ、なかでも歌麿・写楽とその周辺絵師たちの時代は圧巻です。



望月玉泉〈牛図〉明治時代

◆千葉市美術館所蔵作品展 「屏風の世界」2月4日（日）まで

千葉市美術館の所蔵作品のうち、屏風形式のものを中心に展示しています。住環境の変化により現在の日常生活で屏風を用いることも少なくなりました。この機会に現在忘れられがちなものとなった屏風の機能や屏風ならではの絵画表現について目を向けていただければ幸いです。

◆千葉市美術館所蔵名品展 2月10日（土）－3月4日（日）

当館7・8階の全室を使用し、近世および現代の作品を御紹介します。

◆第32回千葉市民美術展 3月10日（土）－3月30日（金）



吉原治良〈無題 作品(2)〉1960年頃



チャールズ・ウィリアム・バートレット (根岸)
1916 (大正5) 年 木版多色摺、紙

チャールズ・ウィリアム・バートレット (Charles William Bartlett, 1860-1940) は英国ドーセット州の生まれ。はじめロンドンで、後にパリで絵を学びました。旅を好み、郊外風景や農民の姿を穏やかな水彩で描き、画家として名を成しました。1913年には東方への長い旅を計画、インドや中国を経て東京に辿り着いたのは1915年のことでした。

ちょうどその頃、「版」の魅力を失い衰微しつつあった浮世絵版画を憂い、その再生を企むひとりの版元がいました。この版元、すなわち渡邊庄三郎のもとに自作を持ち込んだのがバートレット。渡邊は木版表現にふさわしい作風と考え、ふたりのコラボレーションが始まります。彫師と摺師を迎えた伝統的なスタイルでの制作はおおよそ1年に及び、21点もの作品に結実しました。バートレットは1917年に日本を離れてホノルルに居を定めるのですが、ふたりの交流は絶えず、ハワイに取材した新作も出版されました。

この作品はバートレット滞日期の1点。横浜根岸の雪景色です。ひときわ高い松の木を前景のアクセントにすえ、根岸湾をはさんで遠く霞んでいるのは三浦半島です。浮世絵的なのは制作工程だけではなく、背を向けて黙々と歩く人々や、たっぷりと雪を載いた樹木や家の群などに、浮世絵に典型的な「かたち」が選ばれています。北斎あたりの雪景を学んだものでしょうか。それでいて空間表現は自然で、素朴な描線などにはバートレットの個性も感じられます。東西の視点がひとつの画面に仲良く共存し、かつてない造形を得たといえるでしょう。

実は明治期末以降、バートレットのような「外国人の浮世絵師」は、ジャポニズムを背景に数多く来日しています。そして奇妙なことですが、本図のような作品が浮世絵を忘れかけた日本の若い作家たちに江戸の香りを伝え、表現上の刺激を与えることにもなったのです。浮世絵という高度な文化をめぐる、海を超えた実り多い対話を聞く思いがします。なおこの作品は、2月10日から始まる所蔵作品展に登場する予定です。ぜひその目で、時間の堆積と人々の交わりとが生んだ版画の美質を確かめてください。

本館学芸員 西山純子

美術館のご利用あんない

◆ NTT ハローダイヤル 043-227-8600

1-2階 SAYA-DO HALL
さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物(ネオ・ルネサンス様式)を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階 MUSEUM SHOP
ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7階 AV CORNER
映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

10階 ART LIBRARY
図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

[開室時間] 10:00~18:00

11階 RESTAURANT
レストラン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

[営業時間] 11:00~21:00

- JR 総武線千葉駅
- 東口より徒歩約15分
- 京成バス大学病院行または南矢作行(のりば⑦)「大和橋」下車徒歩約2分
- 千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩約5分
- 無料巡回シャトルバス「チーバス」(のりば⑨)「中央区役所・美術館前」下車(11:05~18:35の毎時05分と35分に出発・水曜運休)
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

